古謝さんは沖縄の海が好きだ。けれど、子どものころに遊んだ地元・水釜の美しい砂浜は消えた。基地建設によって住民の土地が取られ、海を埋め立てて住宅が造られたからだ。一九七二年の「本土並み復帰」も「何が良かったのか、さっぱり分からない」と話す。米軍基地はそれまで以上に押し付けられ、海辺は本土の資本によって乱開発された。沖縄の自然は破壊され続けてきたのだ。

「ネーネーズ」時代の「黄金の花」は〝こう歌っている。〈黄金で心を捨てないで/黄金の花はいつか散る〉。「お金、お金。お金はみんなほしいでしょ。でもそんなに自然を壊したらしっぺ返しを受けるよ。沖縄の自然をすべて元に戻せなくても、せめてこれ以上壊すのはやめにしようねと私は言いたいの」

こしゃ・みさこ　1964年生まれ。54歳。88年より坂本龍一氏のレコード制作や海外ツアーに参加。文楽人形の淵脩氏とのコラボなど多彩な活動を続ける。2014年に結成した沖縄民謡女性4人による「ちゅらないさぬ」では、米軍基地問題に疑問を持つ坂本氏と共同でチャリティーシングル「海和世界報（みるくゆがふ）―underwoled」を発表。

これ以上の自然破壊やめよう

その環境破壊の最たるものが軍事基地だ。

基地建設が強行される辺野古の海では、昨年から護岸工事が進められ、今年七月、六つの護岸がすべてつながった。広い海域が囲い込まれた後は、潮流の止まった護岸の内側で魚介類やサンゴなどは死滅するしかない。

「今、造られているのは巨大な軍港です。私たち沖縄人には見えないから、米軍は核だってなんだって持ち込めるでしょ。戦後の基地は強制的に取られた土地に造られたけど、今度は違う。沖縄が自分たちで差し出すことになるのよ、ここに造ってくださいって」

古謝さんは米軍のヘリパッドが建設された「やんばるの森」の汚染にも心を痛める。そこは県民の「水がめ」だからだ。ヘリの洗浄で汚れた水がそのまま流されている。「米軍は、フェンスの中はアメリカだからかね。沖縄人を同じ人間として見ていないね。日本政府もアメリカがどんなひどいことをしても何も言わない。私たちはどちらの国からも攻められている…」

自分たちで土地差し出すことになる

辺野古沿岸部で囲い込みが完了した海域＝8月18日、沖縄県名護市で（小型無人機から）

辺野古新基地が完成すれば二百年は使えると言われている。軍事植民地のような扱いを受けている限り、沖縄は顧みられることはないと思っている。

もうひとつ、古謝さんが納得できないのは、県民に札束をちらつかせるような政府のやり方だ。「翁長さんが基地に反対したから補助金をカットしたでしょ。基地の建設に〝うん〟と言ったらお金をあげるなんて、まるで子どもを手なずけるようですよ。まっとうな政治家が出てきてほしい」

翁長氏の遺志を継ぎ、県は辺野古の海の埋め立て承認を撤回した。現在、工事は止まっているが、国は知事選の後に、土砂の投入を始めようとしている。拙戦にもつれ込む選挙に古謝さんは沖縄の分断を憂う。

「基地をなくしたいという思いはみんな同じはずなのに、ウチナンチュー（沖縄の人）同士が戦わされるなんてね、悔しいですよ」

童神を作ったときの初孫は二十歳になった。「ミーコ」と呼んでくれる七人の孫たちがいとおしい。「孫たちはこれから長い時間を生きていく。彼らの親の世代には、今度の選挙のことをしっかり考えてほしいの」。古謝さんの願いだ。

ウチナンチュー同士が戦わされるなんて 悔しい

「私はただ基地に賛成だ、反対だって言うのではなくてね、未来の世代のためにどんな沖縄が残せるのかね、それを考えたいの。だからね、よく考えて選挙に行きましょうねって」

予定時間を大幅に超えて古謝さんは語り続けた。それは決戦を前にウチナンチューだけでなく、沖縄に過重な基地負担を負わせる政治を変えきれないヤマトンチュー（本土の人）にこそ伝えたかったことだろう。最後に古謝さんは言った。

「私は沖縄の唄者。沖縄に生きてこその古謝美佐子。沖縄を守りたい。あらがえないって、無理だって、あきらめちゃいけないって思うの。それだけよ」

取材メモ

音楽は政治に触れてはいけない。そんな風潮がある。主張が左でも右でも、政治的なことを歌い、語るとたたかれる。古謝さんも勇気が必要だったろう。本当にだめなのか？「ばかげたことだ」。ロックバンド「U2」のメンバーは、若いころ批判を一蹴し、スーパースターになった。（裕）